

花柳事情

醉白道士書其
田國

下

風
3
三

76
434
3



門 津 6
 號 434
 卷 5

明治二十六年十一月五日

坪内雄藏氏寄贈

花柳事情下之卷

花柳御門 醉多道士

戲著

○娼妓の心ろ

朝あさ九こ張ちやう氏しの婦ふとなり夕ゆふ小こ李家りやの妻めづとなり而しかして明あ旦だの又また誰たれ人の仮かりう靴ぐつとなると知らぬ真ま小こ放はな屁ひと馬うま小こ乗のりとるが如ごとき景あや像さむを以もつて墓かぶなく光ひ陰かげと消きえたる者ものの娼あし妓ぢなり其その心こころを推おさるるに空くう々々寂さび々々とて更さらに何なにの目的てきなきが如ごとくなきとも

然しかもとも早はやく前まへ借かを償か却かし素す人ひととなりて帚き掃ほう

花柳事情下之卷

と情人に奉ぜんとある者或は故家より帰りて正しく良人と迎へんとある者他を去るに何れの心も素人となるを願ふに疑ひを客を其を素人となるに償却を速うにせざる可らむ償却を速うあるに來客の繁きを願ひざる可らむ蓋し來客の繁きを願ふと欲せば所謂商賣の情を安く賣り大負け小負け以て客足と繋げざる可らむ是故に娼妓輩に其胸糞の障る客をあらざる以上の貴賤と擇まむ幼長と

間へむ待遇を善くし再顧の念を引ぬり出さず致々たるに一般の心情なりと然まども其待遇小自ら厚薄なき能はむ仮令ば手古鶴さんの官員然たる人小厚く大尻さんの書生風小薄く棚月さんの風流人小厚くおホチヤさんの商人小薄くおがらさんの職人体小厚く花垂さんの温順な人小薄く或は意氣を好む粹を愛む等猶人面の異なるが如く然り去り乍ら此は是意着せしに非む彼等社會より拔く是を唯の情人と

唱へ所謂勤めの役徳ふしてホシの其日の鬱を
 らしと為すのみ而して其厚薄の中間に於て又
 一の情人あり其人何ぞ曰く娼妓の常不聊を
 慰さむる術と求むと雖ども多く貪をまひ其一
 己の力ふる満足する事をき時無心と言へい乃
 ち諾の一字と興の惠む客是なり是客の唯の情
 人より好ざれども財政困難大ゲサナ事アの秋
 不當て便益を得るが故に呼で之を為すなす情
 人と唱へ何れもの心も此客を生捕とせしむるや日夜

心は掛け目と注ぐ。備其次の眞実の情人ありて
 可愛と哉情いと哉肥ツツなり即ち泣きたり笑と
 是膠の如く漆の如く年が明たらお前をんぬの女
 房だヨと云ふ玉音と頂戴する人是なり抑も娼
 妓の其性と浮氣小変むるの自然の勢い花柳の
 慣を已て得ざる事にて此の眞実の情人出来
 と以上の眞小女郎子供の子面小違はむ夕小着
 て坐敷へ出る仕掛の更なり筭の鈿ぎし紅禪の
 勿論煙管の雁首火箸の折でも壊と洋燈米国

酒場端ばかり下駄でも手當り次第目付次第十の
字の尻と右へ曲げ或の賣飛して以て身揚を為
し如く技と事實小深窓の阿娘が初意より甚ど
し已小茲に至る借金の嵩む何の物りの鞍
替り持て来い下馬の剥で往け私一やお前さん
小命と遣るヨと喰ひ付踏み倒さし風趣小至
る豈危険なむや然るに世の流季なり情合ハ
皆天堂小脱走せり且ハ娼妓も伶俐小たはと意
より慾と重んむ故小右の如き者ハ三千の紅裙

中二三で見るとのみ然らば則ち娼妓の心ハ其年
季中唯面白かりしと遊んむ脱籍と願ふの他亦
一の念ひなきハ明々白々し世の鼻下長ヨ彼
ダ年季中商賣し一夜の情と真し受け幻と抜
して自うら馬鹿と見ると勿れ餘ハ厚待所由の條
小照し看ハ其大畧と得ん
○二階の鴉母さんの事
二階の鴉母さんといハヤリテ婆アと謂ふ樓上の
一室小居と占め娼妓の取締りと為す者なり客

の纏頭と楼主より給せらる一田より少なりら
 び一田五十疋より多うぐりる金と以て衣食の
 資とかり昔日小在てハ三途河畔小住力の奪
 衣老婆と同等の威權と保ち頗ぶる残忍の所置
 と施こせしが解放後の威權頓小挫げ今ハ取締
 りの名あるも其実ハなきが如く唯ぞかいらん
 が真の情人小熱くなり他一客と疎んむる時
 當て異見と加へ或ハ逃亡せんとする挙止あり
 時之と預知して楼主小報ト又ハ朋陪と口論或

ハ喧嘩の際之と取り鎮めり等小過ぎ故小常
 ハかいらん又媚びり十疋も多く纏頭と貫をん
 とある状態あり但し並下兩店の娼妓ハ梳櫛と
 置ざりて以て鴉母きん之と兼任し甲の客室小
 長く居て席小至らざる時ハ呼で之と促がを煩
 と為れ故小中店以上の鴉母より稍や權あり娼
 妓も亦其世話小なると以て魂性悪き目小遭と
 恐ま自うら意と迎ひ時としてハ我客の席へ招
 ねき飲食せしむ人の物で世辞とをるとハ其ま

之と謂哉客こそ宜い面の皮と謂ふべきなり

○遊ぶ可らざる日

親爺曰く何日でも遊ぶ可らざる日だ何程眼
の栗玉を剥くも遊ぶ者の必ら遊ば何ぞ知ら
んや其身壯時遊んざる事々然し乍ら遊んで馬
鹿々々しき日あり請ふ之と明説せん詩の大雅
一曰く実々有なま霜がまき三月花の三月誰も来
ると是の孔子殿が鄭小遊び一頃作りし者とう
唯小至せ何に至せ其趣向の誠よりと雖ども

今一步進んぶ之と見えバ厭慮甚ど穩うなまき

なり如何となまきバ若し人之と信ト霜枯ふのみ
至りこらん小ハ一娼妓より六七人の廻して
取りや明けし客の空禰小一宵を明とと奈何せ
不彼の雨天と會し今宵こそ廻しなうらんと欲
して至ると誰も同情なると以く平時より客多
きと一般の事去まバ廻しなきハ到底豫知し難
く唯ど時此運と不運小任を本り又如何ともま
可らば故小遊ぶ可らざる日と覺知して馬鹿と

見ざらに若む其日とい何日ぞ指せ日く紋日物
 前是なり紋日小ハ游を花柳の情游治の勢ひ
 已ぞ得づ惣花を投さざると得む紋日左の如し
 ○一月松の内 ○三月三日四日 ○五月五日
 六日 ○七月七日十五日十六日 ○八月朔日
 ○九月九日 ○十月廿日 以上ハ旧制の祝日
 今もとも己まへ取込の都合を以て紋日となす
 ○十一月酉の日 鷲神社の祭典 ○八月十九日
 吉原氏神の祭典 此兩日ハ惣花を要せざれど

游客楼々小充ち愉快と妨げ或ハ閨中不聊なる
 が故小遊ぶ可らざる日と為す其他ハ物前即ち
 中元歳暮或ハ寒暑衣も更の前ハ無論無心と言
 者とも然し初買や裏あは先小扱ふ敢て
 求めざるが故小諸君の随意とす

○客の容姿の事

人各々嗜好あり我と同トくらんと欲まも決
 て得べうら況んや容姿をや然まとも男子ハ
 清香梅の如くして海棠の燦爛とるが如きを願

ふ可らむ殊小花柳社會の氣障と忌身と擯斥を
る所なきは面白く愉快と取らんと欲せば別
て注意せざる可らむ世の少年子弟の動もま
ば斯まきば思ひ付まん彼まきの厚待と見も
嘔吐と催ガを容姿小く至る者間々あり其容姿
と言ハ散髪と前部より後部へりけり割り羽織
ハ長くしる裾塵と拂ひ紐と引つめに結び高五
六寸の高履を穿ち時計と胸部小赫つりせ或ハ
帶の中間小垂と唯拙者ハ時計と所持仕り小間

此段御披露申ゆと云ハぬ斗その状態首ッ玉小
西洋の鼻第試中と宜ハ氣きなりと捲まつけ変へハ
氣取りて歩あく者一ハ真物小擬へんとして女の
目の巧うくも弁べんぜを擬まハ南部或ハ綿名仙せん容
姿と虚衛兜うすゑのたての毛けハ帽子と海虎うみこと見みせ萬事大ばんじだいデ
サ小見みせりける者一ハ野暮やがの癖くせ小意氣いきグつと
南部或ハ御召縮緬おぼしちぢみの半纏はんぢんと着薄きうすべらの高履こうりと
穿きき折をり小拳固こけんこと内袖うちそで小造つくり之と肩かた小表あひらを
郷里きやうりの放言ほうげんへカラどのペランメイの語ことばと交まじへ

アルミネの指輪尻尾の頭ハも知らざる
華等ハ面前振らとびと雖どもおいらんの胸中
已に之と厭へバ先々振るゝ算悟なく至まハ間
違なき者とを但し容姿のかいらん小意小適
事ハ同樂相談中道楽指南小尽しとてバ今重
ねる此と速む

○鼻毛を讀む事

若しかいらん大層いひ琴が出来すしとねと問
り彼を必らむハア誰さんが持て来て被下む

ツたのと答ふハ仲どんハ後ち知ると待
む此時かいらんハ是と機會ハ必らむおノ
琴より小簞子が欲いと頼んが小琴を被下とら
ら真個小困るまをよと言ん此を則ち小簞子と
買ふ兵ろと云謎語ハ其話次ハ甲客ハ斯く
真実を以て妾を見つ故小妾も亦と待遇と厚く
し之の小報ハと云ふ語氣と含むハ往々有る所
る則ち客の腹とクスグル策略此時小當てや客
人整々骨々と其ヤア善ひ客が有ねへ大事小

自願痴情不知痴
猶技迂箇芳名之
歸對細君無面目
枉道珍車探訪為

紅紫魔王

四四



自歎收滿隔世
影影在
有還偏
一
去
向
維
所
繫

子德性史四四

被讀鼻
毛圖



と一ヨ私一杯ハ及バねへ事ごとと一歩進で彼で
制さば随分花柳の黒人な色ども多く其甲客
の手にかひらん此落ん事と妬らみフム左様
小篋子の代り小琴と呉る篋捧も無へ者ど今度
来り時私一ダ持り来て進やうと約束つハ游客
一般の情態鼻毛と讀み始めといハ小斯の如
くかきバかひらんハ客の已と喜ぶと知り一昨
日乙客と戯劇へ往き一とが最一遍觀と御坐
い外から連き往り頂戴な杯と勧め込或ハ綿

名仙の寝巻を持ハか前々人のヲ別小持らハま
一とららと之で着くハ召縮緬の一反も貫もん
と欲し總く海老と以く鯛と釣るの手段ハ係る
ハ鼻下長漢の常小一て商賣の情と真ハ受け延
しと鼻毛の災ひなりとを彼の鼻毛三千丈縁
幻似個長とい則ち此と謂なり世小女ハ溺ハ人
損毛と思ハざる可らむ
○杏ん坊を游ハ様
章臺飛觴の趣き及ヒ情と娛ハ通客の外ハ花

柳小游ぶい只ど巫山雲雨の一點小在るのこ而
して其遊び二十回と雖ども同情五十弔と雖ど
も又同情絶る坐敷小居る間と絃歌珍味小飽る
と否との差こそあとかひらん小可愛からまき
メ殺さるゝ一段至てい其多寡も閑せむ然らハ
則ち吝ん坊な遊び様と雖ども一文をの素漢
貪りう遙るに上手なりと一決して賤しむ可ら
む或人曰く吝ん坊な遊びハ大見世までい出来
可らむと答へ曰く然らむ我を一回三十二弔五

厘あまは淡白と八十弔弔弔弔五厘のかひらんを買
ひ得七十五弔あまは中見世三十七弔弔弔弔あま
は並下小至るを得る然し下ら宵より至るを得
む必らむ散刻二夜十と待る之と試みる也之と寝
込と名く其大見世に至るや茶屋と酒食已
に飽るると告り酢臺一枚と取り纏頭二十弔
と敵媚の梳籠小投り以て吝ん坊の尾と蔽ふ中
見世以下ハ其尾と蔽ふに及ばさむ王代と菓
子或ハ酢の價あまは足りとむ但し並下ハ臺の
物半ハ日即ち十

大石の長清

二五 遊びも亦段々小して一宵数十金で散り酔
ての上へ分別も益なく青息と吹く歎息を人
物の先づ氣の知まる白痴と云も不可なるを

○青楼と驚りを惡詠

婀娜々々權妻も日小側ら小在バ之小飽き窺窺
たる歌妓も日小聘まをバ娛しうらま遊治も亦
斯の如し遇小意外の諧諷を演べ以て人間を玩
弄せむんバ遂小遊び様小究まをるを一茲に
一椿意外を忠誠と説くと聴け蓋し道楽子の内

幕小係る○イヨ千代美助大人君小逢たら話さ
うと思てぬと奇々怪々の椿事ダありテナウム
何いふ筋と相変らむ又疝氣筋ごらう道筋の蒲
鋒の竹輪の半片なぞと云安ッが代物で無の
サ実ハ此頃些書々の者ダ有んだガ日々來賓の
進撃で寸暇と得むと云者ご其処で僕ガ此ぢや
ア迎も立きれ無へ踏と熱海小避んが往復小閑
がわろ寺院小逃せんう寂寥かろべー一番之と
青楼小避んと先づ落付させハ極とと云者ご然

青楼も宜いひが尋常あつらふまでい女郎にようぢやうともが五月ごがつ蠅はぶてな
らねへと千思せんし萬考ばんかう三足立さんびきだての雪隠せつおんへ籠城ろうじやうの果こて
孔明こうめいも降参かうさん楠公なんこうも誤あやまり證文しやうもんを呈まへてと云ふ古今
珍無類ちんむるいの謀計ぼうけいと雲子うんこと俱ともひと出いしと武ぶ醜しう
ねへ景容けいよう詞しどナア夫おとこから道夫みちおとこら先まづづ玩球子くわんきうし
の許もとへ至いたり時小玩君せうくわんきん僕わがハ漸ゆるらく人間にんげんと去さつと
女によの子この多おほい国くにへ往ゆのどが夫おとこハ付つてハ君きみハ依よ
頼たのせざると得えざるなりと云い一件いけんがある他ほかでも
無なが僕わがハ金かねと持もつ居残ゐのことあるのどりら明日あしたの

朝青楼あさせいろうら金策かねさくの使つかへ君きみの許もとへ来きまら其時そのとき
君きみハ使屋つかやハ遅おそくも晚おそまでに金かねと持もつ迎むかひ小往せう
らら安心あんしんしと置おく呉くれろと一言いっぺん云いつ呉くれを玉たまへと
頼たのみ置おく芳原ほうげんへ至いたり浩然こうぜんの氣きを養やふ果はて阿房あほう
から去さに呼起よびおこされ紋切形もんきりかた通りへハ勘定かんとと會あ
計けいと出いしとら若衆わかしゅ氣きの毒どくどが持合もあせり足たり
ないら身代みしろ有あり限かぎり五十いそ疋び遣やつて置おく就つて
ハ斯かまま使つかへ遣やつて貫ぬいぬけ付馬つぎうまハ堂どう不都合ふとくあ
が有あらと昔むかしく説せつつけ使つかへ出いしと後のち僕わがハ一

間小閉居ツて草稿小係と云のどテウハ夫ら
道スルと間もななく使が帰て来が玩球子グ
固く請合たゆる空手で戻ても更小苦情ナサ
チム、左様ヤヤ道遂小攸々と一日間々ニ
十枚の草稿が出来たと云のどチ玩球子ハ来ら
ネ道お来りのウスルと楼々且那まどお返
事がお坐いませんがと言故ハテ最来さうな者
ど然く彼家で請合のたうら大丈夫小思つて具
ねへ時小若衆煙草入の底小十匙有さうらか前

小遣らへと先づ若者々懣着して暫時督責の路
と塞だのサ、ハム成程然く拂と遣かい内ハ酒
肴と出なひら此小ハ不自由とらう道所ダ
然らむサ、ハテ何云者で道昨宵買と女の処へ
往てオイおいらんと萬事馴々しく行り時小我
輩何々食ういながら家を出しく兵ねへうら困つ
かる所今袂うら三十弔出たりら酢とか馳走
様と思ふが家へ知ま、バ無論取らきて仕舞
らかいらんが買ふ積りおして買か兵ナ然

たか加三書

二五

皆を酔ふ化ちやア困らうら其德利二本隠して
持出し酒を十匁買て貰いてい何んとかいらん
此大叶へく呉れへた其代り今度の急度お礼を
まうらと云ふ処が彼奴も食とい者ごうら梳
櫛と計りトウく、残らむ二階へ繰あげ僕の酔
と六ツ七ツ皿へ取り酒の土瓶を酩として貰い
又元の部屋へ飛込を一盃引り其晩の獨食を
寝込ヨ、ウ、此奴ハ妙ど夫うら道スルと又間
もなく天明たらう其処で再と玩球子の許へ使

て出しと処が今度の玩球先生が金を出し、昨
夕此通り金まゝ紙入へ入る出掛様とまゝ所へ
客が来々遂往を小仕舞に今うら三四軒用と
しうてら往うら其積りを居て呉ると云返事ご
うら又使り帰て来ても僕小迫ら無へ訳サ夫ら
ら又々草稿小掛り飽むバ女郎の部屋廻り或は
文の代筆杯りく又々草稿小係りトウく其晩ま
でに都合五十枚の仕事が出来と、夫で丸
二日たね道左様サ其処で用も済ごり自家小も

用ダ有どらうと思ふうら手て叩て若い者を呼
び一寸會計書を見せく兵んかとの之を見てオイ
若衆是まに二四五十弔と書く有が間違トヤア
無りいと念て推と否間違の御坐いません二四
二十五弔ハ一昨夜のか遊びの代後の二十五弔
ハ二度の使ひ賃で五弔以外と云うら左様うへ
夫トヤア間違トヤア無へのう馬鹿ら一ハ我輩
亦五四二十弔と思さうら勘定が不足だと云と
のハ斯程ん斗りなう持合せくわと者て飛と閑

漬ぶ一と仕と五田札一枚投り出ると処が若
者の口もんぐも尿け小取まう唯左様で御坐い
まうさう書様が悪ふ御坐い外て誠小餘計なか
心配とけきしてへいと御世辞だらうと釣と
持く来さか何と二四五十弔で一晩ハ愉快と極
め二日一晩ハ玉も何も入らむ小女郎と愚弄其
上心ろよく用て為さう何と咄々怪やどらう
チ「イヤ堂も君の様を悪誣する者小係てハ青楼
も形をかいらん等もか飯を食ねへ始末と処

で草稿とい何が出来たのぞ ^道花柳事情の中と
下巻が落成しこのダ。アハ、、、、、

○身受けの事

娼妓果して誠あうら何そ必しも然らんかひら
ん果して嘘と実ら何を必しも然らん唯一朝意
氣相投はまは則ち比翼連理山盟海誓童と借老
同穴と願ふのみかむも命と北籬の霜ふ委し魂
何有の郷小留め長く風月場裡の絃上小歌ハ
きん事と思ふ若し夫相投せまんハ唯ぞ商賣の

假情を以て客小遇せし有のみ然まども彼も窶
策小出るあまハ赤と赤嘘と突とあり窶策とハ
何ぞや身不相應の借金と逃ん為り勝手放題客
と懣着し心小もあふぬ人小身受きき者一ハ
真の情人と早く盟と訂し夫婦とたらん為り
身受の客と踏臺とたき者是なり余や花柳風月
場小遊ぶ久し矣而して其間身受せし者々見
多く踏臺及び借金の返済方小仕ハ客馬
鹿小過む未ぞ嘗て情人小見受さし者見

古句小曰く色男金と力ちからありけり」と真小然
 是々以て見受さるるや三四ヶ月間ハ其客の
 心小從したがひ恩おんと荷まかふの色ありと雖いども漸げん々小
 正体まことと現あらえし主ぬしの無なき窺うかがひ情人こいじんと呼よび聆う聴き
 の愉快うきぐさと尽つくしたる後のちち日ひと期きし洗あらいざらい衣い
 類諸道具るいしよどうぐと奪うばつて逃亡とうぼうし或あるハ其妾宅せうたくと我名わがなと以も
 く購かふひ遂つひ小押領おしりやうして情人こいじんと俱とも小住まみ然しから屯とん
 入いバ主ぬし小愛想あいきやうと尽つくしやんが為ため朝酒あさづけ買食かひくふて
 寢ね今日けふハ戯劇しげく明日あしたハ游山ゆざん甚いたしきに至いたてハ故意こい
ワガト

小寢こね小便せうべんとかな者ものあり其主ぬし縦たへ首くびツ文ふみけ惚心おぼこころ正ただ
 小有こゆう頂天ていてんとありと雖いども黙止もくし屯とん能よむ之の小
 一の劍突けんつとと興きふまは之の時ときと益ますを乱暴らんぼうと
 極きめ遂つひに則すなはち暇状ひまじやうと請こひ手切てきれと取り昨日けふか
 出いの弄言ろうげんと遺のこし白大しろおほの尻しり小真帆まほけり情人こいじんの
 許ゆるへ去さるる或あるハ再またとび川竹かわたけ小入いるヤレく借か
 金かねと清きしとと二度にどの勤とめと屯とん類るいハ世間よこ小多おほ
 く見みる所ところなり故ゆに此輩このたぐひの見受みうけさるるや大抵おほ其
 戸籍こせきと主家ぬし小付おせぬ曖昧あいまいの遁辞とんじと設たまけ月日げつじつの

遷延を主趣とも蓋し戸籍を付ての慾を遂す事
 能はざれば也見受の事豈馬鹿々々しくらばや
 然らば則ち見受の果しく為可らざる哉曰く
 決しく為可き事非也と雖ども精神已不飛
 散しとる痴情を奈何せん故之を為んと欲
 せば種々の策を以て娼妓の底心を見正し其業
 の賤しむべく花柳の惨状を飽き真に身を委ね
 る其恩に依り身を立てんとする真心あり本人
 の父母若しくの籍の在る所の親族を計り親元

身受を為し其親族より更し已む方不迎へ直ち
 一戸籍を請取し若む斯の如くなせば彼を綴へ
 恩小背いしく已む慾を逞ましむせんとも戸
 籍を壓へらる到底目的を達する事能はざら
 為し所謂苦しまぎれの智を振ひ二度の勤め
 出て身受金の幾分を返還し戸籍を取り戻す小
 至る然も則ち其金仮令半額も過せと雖も三
 四ヶ月間を以らんや揚ゲ詰みせしとせば痛
 く瘡癩も障らさるなり世の見受をせん

たる馬鹿者深く鑿みぎらる可らむ

○花柳事情の惣まく

余や既お種々の珍談と看官お報道し千金の秘
事と漏せり茲は禿筆と閣人とせし口尚お欲
て已念ひかな揺て止まらむ則ち花柳の事情
と惣まくておまくつる全局と結をんと欲を柳
も花柳の真人間の所為と離まらる一種特別の
一世界おらく金ある者と且那と唱へ金をき者
と素漢貧と呼び文明も野蛮も其身お入らむ貴

頭も卑賤も其の眼と止まらむ只ぞ金を遣ふ者
と推し最貴の人と為し如何なる不條理と唱
ふるも術をさま如何に罵詈と極むるかへ
と笑ひ其金力の下お屈し意を失わん事を
之を恐る是を以て貪婪も亦甚どしく且一點の
慈悲心なす然ら則ち禽獸と去る甚ど遠らむ
と云ふ可しと雖ども此家業商賣のみ若し夫を
金力の下お屈せむ及び慈悲の心ある時此業
と営む事あるいざればかり試し思へ白門の

桃花を蹂躪し幽谷の鶯兒を啼しオ、嬉し
花つらうい情の嘘実ハ鬼小角貨泉の為なり
然るゝ之が價の不足あるに際し慈悲の心で商
賣に用ひ之を許さハ口糊の術何よ由りて立
ん又娼妓の辛苦を愁まきサゾ辛らうく
證文を卷く解放せば門戸何にりく張るや是
故小心其無慈悲と知るも所謂見く見ぬ振聞て
聞ぬ振し之を為すのみ而く矢鱈一人は屈を
るハ其商賣を畢意衆人の遊び場なきハ客の

愉快を妨げ毫も其意ハ不満かりらしめんて事
とし斯く卑屈を極むる者とま然まど此界屈
ハ花柳社會ハ花の無形の代物にり是
が為めに萬事非常の高價を貪る其貪婪なる
亦已を得ざるなり嗚呼花柳ハ別世界なり人間
を玩弄する別天地なり此極樂情土に遊ぶ者冀
くハ樹下石上の難行小由て得さ御布菴を沢
山持つて活普賢の來迎を辱けりせん事本
願と為ヨ和尚復何とら扱さん此書道士が居残

の閑暇くわんげなり。日子ひこと要えをる前後三日所謂すゐ撰書せんしよの尤なほも甚しだ。一者ひととを故ゆゑへ小事せうじの實まことの毫こゝろも失うたひざれども行文ぎんぶんの拙あやまなり。抑揚おさげもなく頓挫とんざもななく胸中きやうちゆうより出で随ませ筆ふで小こ樸くり随ませ名なけく生醉なまよひ体の文ぶんと為なる。此こゝそ世よに生醉なまよひと虐いぢめる者ものあり。是こゝ皆みなさん堂どうぞいぢめく御ご吳ご々々なり。ヨ

明治十三年十二月十五日稿成

花柳事情下之卷終

花柳事情跋



人莫な不好く色しよ。而色界しよがい之盛せい莫な盛せい乎や。吉原きちげん其その吉原きちげん之盛せい以もつ有あ娼妓ちやうき焉や。其その有あ娼妓ちやうき以もつ有あ游客よかく焉や。其その有あ游客よかく以もつ有あ餘財よざい焉や。其その有あ餘財よざい由よし人勉ひとをん其業そのごう以もつ得え其利そのり焉や。得え其利そのり而して有あ餘財よざい有あ餘財よざい而して謀ま花柳かりゆう之遊ゆ其散財さんざい之方そのかた不得えず投機てうけい則すなは用財もち滋多しやた取と快た滋少しやう矣や。如其快た不快た則すなは謀ま其遊そのゆ者もの自よ不得えず不加く少すく游客よかく之少すく所以ゆゑ其境そのけい之招ま凋衰てうさい其境そのけい之趨ま凋衰てうさい所以ゆゑ減へ人間にんげん一大樂地いちだつらくち也や。余故よ曰い其遊そのゆ之方そのかた得え投機てうけい則すなは招ま色界しよがい之盛せい致いた色界しよがい之盛せい可以よ開ひら人間にんげん一大樂地いちだつらくち矣や。何以ゆゑ能よ知し

遊治之方。投機之法。余之道樂夥。徒醉多道士之花
柳事情是也。凡花柳境裡之事。無巨無細。無表無裏。
載莫不畢焉。錄莫不竭焉。余既有志于斯。著芳原新
誌。未脫稿。而今見此編。不勝同好之怡。遂書一言。卷
末。嗟乎。醉多道士。於游治之方。投機之法。有勲勞。非
尋常情史之比也。

明治十三年十一月廿二日。識於竹天堂南窓。

紙生

寬

印

紫燻

紅植書

印

印

